B 126　既製服適合度の分析に関する研究　―分析方法の提案―

東都女大家政　○銭谷八栄子　岡部和代　山名信子
相愛女短大　中野順子

目的　既製服サイズは、身体各部位の寸法を根拠としてつくられたとされているが、消費者の中にはサイズが合わないという苦情が多いのも事実である。従ってその苦情を客観的に検討し、多数の人に適合するような方策をたてる必要があるともいわれている。
本研究は、従来から計測してきた成人女子の身体計測値を用いて、現状の衣料サイズ（JIS L 4005）を再検討する一方法を提供することを目的とする。

方法　1972～1978年にかけて身体計測を行った18～29才のミス550名，25～49才のミセス643名，合計1193名の計測値を基にして、衣服製図に使用される15項目の身体各部位の寸法を衣料サイズと照合する。すなわち

(1)指定された衣料サイズに対応する㋐体型別表示による適合者比，㋑単数表示による適合者比，および㋒範囲表示による4部位すべての適合者比。

(2)指定された4部位のサイズを用いて作られる衣服の他の11部位の衣服寸法が範囲表示適合者の11部位の寸法にも適合する者の比。など生産者側と消費者側の立場から検討した。

結果　A，Y，AB，Bの体型区分別の適合者はミスで7.6%，ミセスで4.2%、最も範囲の広いS，M，Lの範囲表示でさえも全体の約3割しか該当者がなかった。またこれらの該当者がその服を着たときの他部位の適合度は、11部位のうちS，M，Lともに肩幅，背幅の部位が不適合の者が多かった。特にLサイズに高い不適合率がみられるが、これらの部位については試着時のチェックポイントとして注目する必要がある。しかし容易に補正しにくい部位でもある。今後、全く適合していない人についての対策を考慮する必要がある。